同窓と同郷の縁の下に…

<はじめに>

東京秋工会の活動に関与するようになってかれこれ三十数年。その活動の中で多くの同窓の方々と触れ合えて来られたこと、また東京秋工会の一員として参加した秋田関連の会で故郷を同じくする多くの方々に出会えたことは、今の自分にとってとても大切な財産のひとつになっています。

そんなことを念頭に置き、主題の寄稿に臨もうとした矢先、会からの連絡メールで、大先輩の斎藤右二郎さん(S26M)ご逝去の報が届きました。東京秋工会の活動に関与するようになって以来、多くの先輩方にお世話になった私ですが、中でも斎藤さんには…という思いがあります。そんなわけで、まずは斎藤さんとのことから書かせていただくことにしました。

<斎藤右二郎(ゆうじろう)さん(S26M)のこと>

斎藤さんは、第2代の谷藤正三会長(S12M／故人)から第3代の澤木誠一会長(S26E／現顧問)に渡り、12年間幹事長を務められています。平成7年、三平俊悦さん(S39A／前会長)に幹事長職をバトンタッチした後、副会長を2期ほど務められ、幹事会(現役員会)を退かれました。

斎藤右二郎さん
6年前にお会いした時の写真

以前聞いた澤木さんの話しでは、自分が前会長の後を受けるにあたっての条件は、斎藤さんに引き続き幹事長をやってもらうことだったそうです。

斎藤さんと澤木さんは昭和26年の同期卒業で、この年に卒業された方々のほとんどは戦後の学制改革の関係で、6年間秋工に通われています。その辺のことについては、加賀谷健治さん(S36E／現副会長)が調べて書かれた記事が KANASA VOL.23 に掲載されていますので、ご覧いただければと思います。(当会HPにバックナンバー掲載)

私は東京秋工会の総会初参加から2年後の昭和63年にとある方から推薦され幹事になりましたが、当初は一番年の近い方でも7～8歳上の先輩ばかりの状況に、気持ち的に一歩二歩と引いてしまうような感じでした。

会に慣れ始めた頃から斎藤さんはたびたび私の事務所に来られるようになりました。当時フリーランスのデザイン屋として駆け出し同然だった私に、東京秋工会にはこんな人がいるというような情報や東京秋工会を大いに仕事に利用しなさいというような助言をいただき、そんな会話ができたことで、会との距離が縮められたような気がしました。

斎藤さんは信号機関連技術のオーソリティーで、鉄道の信号機設営などで日本全国を回って来られたことなどをよくお聞きしました。よくお会いするようになった頃はプラント関連の設備や機器などを設計・製作する会社の営業部長をされていて、斎藤さんの口利きもあったと思いますが、その会社の社長に気に入られ、仕事を依頼されるようになり、仕事面でも斎藤さんとご一緒する機会が多くありました。その関連で特に忘れられないのは、同窓の川端邦夫さん(S31M／故人)が代表を務められていた会社のタワークレーン新型運転室の開発を斎藤さんが受けられ、開発チームに参加させていただいたことでした。

この仕事での経験は自分のデザイナー歴の中でも大きなエポックとして心に刻まれています。また、この仕事でご一緒した斎藤さんの信号技術者時代のお仲間たちと泊まり込みの徹夜状態で実機試作の製作をやり遂げたことは忘れられない思い出です。

その方たちとはその後も斎藤さん招集の下に何度かお会いする機会があり、その折々に斎藤さんの慕われるお人柄に触れ、仕事などで苦労を共にした人たちとの絆や信頼というものをとにかく大事にする方でした。

斎藤さんと最後にお会いしたのは5年前。その数年前から近所の親しくしている葡萄園をちょっと助ける意図もあり、毎年8月、斎藤さんを含めた昔お世話になった方々にご挨拶代わりのブドウを送っていました。その際の電話のやりとりで、久しぶりに会おうやということで斎藤さんのお住まいのある千歳烏山に伺ったのでした。

前年もお会いしていて、その時に比べ身体が大変そうな印象でしたが、好きな囲碁をやっていることや帰り際に「奥さんに…」と千歳烏山で有名だとかいうお菓子を渡され斎藤さんらしい心遣いの健在ぶりに、まだまだお元気でいてくれることだろうと嬉しく思ったのでしたが、お顔を拝見できたのはこれが最後になりました。

渋谷に事務所を置いていた頃、斎藤さんと私、それに私のカミさんの3人で総会の案内を封筒入れした時期があったこと。会報創刊号の発送は確か三平さんを加えて4人で…とか、思い起こせば斎藤さんとの思い出はたくさんあります。

斎藤さんが幹事長だった頃を知る会員・役員の方が少なくなったことは時の流れとしてしかたのないことですが、斎藤さんが幹事長として会を支えてくれた時期があったこと、会に大きな貢献をしていただいた方であることを、しっかりと記しておきたいと思います。

斎藤さん、本当にありがとうございました。　合掌 ・・・

<何も知らないに等しかったふるさと秋田のこと>

私が東京秋工会の幹事に成り立ての頃、会の呼称は「トウキョウ**アキコウ**カイ」ではなく「トウキョウ**シュウコウ**カイ」でした。「シュウコウ」といえば秋田高校を著す略称ではないのか？ そういえば「ラグビーの歌」にも歌の最後に「トララ秋工(シュコウ)秋工(シュコウ)…」とある、はて？と思いましたが、このことは歴史的なことをちょっと調べてみれば分かることでした。

戦後の学制改革以前、秋田高校は秋田中学で、秋田工業高校は秋田工業学校だったということで理解できました。ただ、早い者勝ち的優先感覚で見れば、「シュウコウ」という呼称はそのまま引き継がれてもおかしくなかったかなとも思えます。とはいえ「アキコウ」の呼称の下に入学し卒業した自分ですから、「シュウコウ」ではやっぱり違和感です。それでもラグビーの歌は「秋工(シュコウ)秋工(シュコウ)…」でなきゃ…ですネ。

東京秋工会の外部交流活動で秋高連(在京秋田県高等学校同窓会連合会)の総会に初めて参加した時でした。会の冒頭、秋田県民歌斉唱の際、プログラムに掲載された歌詞を見て、んん!?となりました。昭和30年代後半から40年代にかけて小学校、中学校、を過ごした私の世代にとっての県民歌といえば、「朝明け雲の色映えで…」の歌い出しから始まる歌でした。でもその時目にしたのは「秀麗無比なる鳥海山よ…」の歌詞。あれ？あの歌ではないの？という思いになったのでした。

後に人に聞いたり調べたりで分りました。「秀麗無比なる…」の「秋田県民歌」は戦前の日本でいち早く作られた県民歌(昭和5年制定)で、山形県の「最上川」、長野県の「信濃の国」と共に「三大県民歌」とも称されていましたが、戦後、アメリカの占領政策の関係で歌うことが禁止され、その代わりとして作られたのが「朝明け雲の…」の「県民の歌」(昭和34年制定)だったとのこと。その後、昭和40年代中頃から「秀麗無比なる…」の「秋田県民歌」復活の動きがあり、現在秋田には二つの県民歌があるということになっているそうです。(より詳しいことはネット検索「秋田県民歌」で簡単に調べられます)

首都圏でのいろんな秋田関連の会に出席する機会が増え、その度「秀麗無比なる…」を聞き、歌えるようになり、確かに素晴らしい歌だと思うようになりました。ですが自分がまだ秋田にいた40年代の半ばに復活の動きが始まったというこの歌のことを教えられた記憶はなく、秋田で過ごした18年間の記憶に確かにあるのは「朝明け雲の…」の歌なのです。首都圏で行われる秋田関連の会では「朝明け雲の…」を聞くことも歌われることもありません。それをちょっとばかり寂しく感じるのは私だけでしょうか。

東京秋工会や秋田関連の会に数多く出席するようになり、同窓・同郷の多くの人たちと交流するようになって、自分は故郷である秋田のことを、ほんと、知らないな…ということに気づかされました。もちろん知らないからといって困ることでもないのですが、アイデンティティーの問題というか、生まれ故郷のことなのに中途半端に覚えているだけで知らないのと変わらない、そんなことに何とはなしにもやもやとした感じを覚えました。

森 幹太さん

27年ほど前、女優の浅利香津代さんによる芝居「貞子」(秋田おばこを世に広めた民謡歌手、佐藤貞子の半生を描いたもの)が上演されることになり、同芝居に出演する同窓の大先輩の俳優、森　幹太さん(S16S／本名：鈴木　威／故人)を取材しKANASA Vol.2 に掲載しました。その際東京秋工会分の観劇希望者のチケットを取りまとめたご縁で、森さんの弟さんで同芝居のプロデューサー 鈴木 潔さん(TV番組の必殺仕事人のプロデューサーなどもされていた方／故人)と懇意にさせていただくようになり、それから1年くらい後のこと、潔さんから「今度、秋田文化フォーラムという活動を始めるので手伝ってくれないか」とお誘いを受け、主催元の秋田ひぇばなの会の活動に参加することになりました。

ひぇばなの会は在京の秋田出身者を対象に「知っているようで知らないふるさと秋田のことを知る」をコンセプトに、秋田文化フォーラムというイベントを開催する活動を展開していました。他の同郷の人の中にも自分と同じような思いを持つ人がいるんだなという共感、何よりも潔さんの人柄に惹かれていたこともあり、参加することにしたのですが、母が認知症になったことや仕事的事情もあって、6年ほどで退かせてもらうことになりました。

そこから話は今から5年前に飛びます。ある日、藤原和広くん(横手工高卒／秋高連現幹事長)から、ひぇばなの会で本を出すんだけど手伝ってくれないかと声をかけられました。彼とは秋高連の縁で、同い年(S30生まれ)ということもあって親しくなり、私が退いた後にひぇばなの会に参加したことも聞いていました。後日、旧知の田村輝夫さん(ひぇばなの会2代目会長／鷹巣出身)からも電話をいただき、正式に手伝うことになりました。首都圏に在住する秋田出身者の方々にご自分の人生を書いていただき、本としてまとめたいということでした。

編集・制作の過程…。企画主の田村さんとは制作責任者の立場で怒鳴り合うことたびたび。私が原稿を頼んだ方が電話でOKをいただいた一週間後に急死されショックだったこと。別の人が原稿依頼した方と私が話すことになり、そのあまりに上から目線なことに頭に来て寄稿を断ったこと。50歳以上を対象にしたものの、40歳代でぜひ書かせてほしいという希望が思った以上に多かったこと(まあいいかで入れることに)。と、書けば切りがないほどいろいろなことがありましたが、平成29年11月、「首都圏在住秋田人一〇〇人の物語」(A5版 292頁)というタイトルの本として完成させることができました。

首都圏在住秋田人
一〇〇人の物語

本全体のデザインから編集制作を受け持ったことはもちろんですが、冒頭序章詩を詩人の曽我貢誠さん(秋高S46卒)と、少し喧々囂々ありましたが半々で書けたこと、自分的にちょっと自慢で嬉しかったことです。その曽我さん含め、同郷のいろんな才能を感じさせる仲間と新たに知り合えたことも大きな収穫でした。

振り返ってみると、前会長の三平さんほどではないにしろ、こと首都圏の秋田関連のことに関しては人より多様多彩に見聞きし活動する機会を得て来たのかもしれません。最近ではかつて自分がもやもやとした感じへの答えというか結論というか自分の故郷観のようなものがはっきりと意識できるようになっています。

先の本の中で、室生犀星の詩「ふるさとは遠きにありて思ふもの」を引用した方が何人かいました。解釈は人それぞれですが、この一節だけでみれば、「ふるさと＝故郷」とは、今自分のいる場所から遠く離れた場所であるからこそ強く思いを馳せることができる対象なのだと言っていると言えます。難しく故郷論を語るつもりもないので、自分の思いを結論的に言うと、私が故郷と思えるのは、煎じ詰めれば、自分が生まれてから離れるまでの18年間の記憶にある秋田(秋田市)だということ。離れていて思う分には今の進化・近代化した秋田市ではない、あの頃の秋田市を思い浮かべることができるから…。だからといって今の秋田を否定するものではありません。また、母を早くに呼び寄せ、その母も亡くなり、帰る家(実家)を早くに無くしている自分にとっての秋田は、ひょっとしたら首都圏にある秋田なのかもしれません。

もしあの頃、東京秋工会との縁を築くことをしないままでいたら…？と、思うことがあります。同窓の縁から同郷の縁へと広げられたのは、あの時、東京秋工会の総会に出席したことに始まるわけですから・・・。

◆ 記事　　舩木 一美(昭和48年機械科卒)